



北原先生を偲んで（北原淳先生を偲ぶ）

小林, 和美

(Citation)

社会学雑誌, 31/32:122-123

(Issue Date)

2016-10-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011154>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011154>



北原先生を偲んで

小林和美

大阪教育大学教育学部教授

沖繩調査だった。その後、タイの農村に連れて行っていただいたり、一緒に韓国の農村調査をしたりした。私が韓国研究を始めようとしたときには、ソウル大学の先生を紹介して後押しして下さった。

昨年一月五日に、北原淳先生が逝去された。知らせを聞いたときは、あまりに突然のことに、驚くばかりだった。しばらくして一二月

を去ることになった歓送会のときにも、カラオケで先生と「芭蕉布」を歌った。一番を先生が、一番を私が、三番を一緒に歌うのが常だった。

一四日に六甲苑で「偲ぶ会」を開くことになり、その席で先生が大好きだった沖繩の歌「芭蕉布」を歌おうかと思つたとたん、いろんな場面が思い出された。沖繩の高速道路で、この歌を歌いながらサンダル履きでアクセルを踏んでいた先生の姿。続いて、宇嘉の海岸の夕日、名護のガジュマルの大木、波しぶきが打ち寄せる辺戸岬など、沖繩調査で一緒に目にした美しい風景が現れた。大阪教育大学に就職が決まって神戸大学

私はい、一九八八年に学部のを入ってから、大学院修士課程を経て一九九五年春に博士課程を退学するまでの六年半にわたり、北原先生のご指導を受けた。当時、先生は四〇代の半ばから五〇代に差し掛かる頃で、タイや沖繩の農村で精力的に現地調査をされていた。私をアジア社会研究に導いて下さったのは、北原先生である。先生の調査に参加することは長らく私の念願だったが、ようやく実現したのが一九九三年夏の

先生から教わったことは、あまりに多い。調査地の歌舞音曲に親しむことは、先生の大切な教えである。沖繩調査の出発前には、沖繩民謡のカセットテープを渡され、すべて歌えるようにして来るように言われた。タイの学会では一緒にロイカトーンのお祭りのダンスをした。その後も私は先生の教えを守り、韓国の歌謡曲を覚えたり、民謡を習ったりした。歌舞音曲は、現地の人々と親しくなるのに大きな助けになるし、教員となった今では、授業の役にも立っている。そして、調査においても一つ一つの大切な教えは、調査ノートをしっかり書き、整理しておくことである。その日に調査した分

のノート整理が済むまでは、お酒を飲んでほならないし、寝てほならない。沖縄でも、韓国でも、このルールは徹底されていた。

先生は、社会的経験の乏しい私に、学会やレセプション、外国の研究者との対面などでのふるまい方を教えてくださり、タイの大学には女性の先生がたくさんいると励まして下さった。今の私があるのは、先生のおかげである。

学問的には、先生のご専門が社会経済史だったため、幅広い視野で社会を見ることを教えていただいた。とくに地域研究においては、社会学的事実だけでなく、政治・経済・歴史的事象をとらえていくことの重要性を学ぶことができた。

教師としての北原先生は、自らの背中を学生に見せることで教えるタイプで、ああしなさい、こうしなさいと直接的な指導をされることは少なかった。いつも社会調査室において、

本を読みながら、大学院生の会話をしっかり聞いておられた。そして、授業で研究報告をすると、せっかくなんとかまとめてきた報告をぐちゃぐちゃにするようなコメントをされた。こじんまりまとまるのではなく、発展的で挑戦的な研究を期待されていたように思う。

今、私は、出会った頃の先生と同じ年齢になり、大学教員として学生の指導に当たっている。社会調査実習の授業では「その日のうちに調査ノートを整理しなさい」と繰り返し、アジア理解教育の授業では自らアジア諸地域の文化を楽しむ姿を示すよう努めている。ほかにも、気づかないところでのいろいろと「北原スタイル」を踏襲していることだろう。

先生が亡くなられて一年になるというのに、まだ実感がない。どこかの研究会でばったり会って、「やあ、小林さん」と、よく響くあの声で呼びかけられそうな気がする。先生の

死はあまりに早く、突然だった。先生に心から感謝し、ご冥福をお祈りします。本当にありがとうございます。ごさいます。

(二〇一四年一〇月三日 記)